

実施報告

# 卒業研究発表会の学内ライブ中継

国分 栄

環境情報学部の2000年度卒業研究発表会は、本年2月初旬の3日間、横浜キャンパス内の3会場で同時開催された。そのうちの2日間は、世田谷キャンパスにおいても、インターネットによるライブ中継が実施された。また、卒業研究は全員のビデオ収録が行われ、そのVHSビデオテープ(全28巻)が図書館のAVブースに配架された。これらの取り組みの経緯とそのビデオ集録上の問題点などを紹介し、これを契機に、より充実したサービス提供へと発展させていきたい。卒業研究発表会の映像は、いつでもどこでも(当面横浜キャンパスに限定)誰でも見られるように、現在、ビデオ・オン・ダイヤモンドの準備が進められている。

キーワード：ライブ中継，卒業研究発表会

## 1 はじめに

近年の情報機器の進歩はドクイヤーと言われるごとく目覚ましい。その変化を捕らえ、情報メディアセンターでも、様々な情報機器が導入されてきた。今年度も、大学院新棟の施設を始め、既存の情報システムの更新、新



図1 映像メディアルームからのライブ中継操作

学科新棟の情報施設の計画と、次から次へと情報システムを検討する機会に恵まれている。情報機器の導入ばかりでなく、これらの施設が実際に有効

に利用されているのか、本年に実施されたライブ中継の事例を取り上げてみたい。

## 2 卒業研究発表会の公開意義

折りしも、2001年3月は、環境情報学部の第一期の卒業生が巣立つ節目の時期であった。卒業研究発表会は、学生にとって3年次の事例研究、4年次の卒業研究と2年間の学習・研究の集大成である。会場で発表される内容は、卒業研究概要集のような紙面上の制約も一切なく、いくなればメディアを駆使し、1年次からの情報教育の学習結果がより反映されたものとなる。また、一方の違った視点でみると、学部の情報教育の成果が問われることにもなる。4年生全員が参加するため、発表技術のバラツキは多少あるが、卒業生全体の情報スキルのレベルを把握するには絶好の機会である。学生が、与えられた短い時間で、どれだけ情報機器を駆使し、卒論の内容

を的確かつ効果的にプレゼンテーションができるかの関心がもたれる。

この点からも、我々教職員は、より多くの学生発表の内容に触れたいし、できるだけ多く発表に参加ができる仕組みを考えたい。これらの卒業研究発表会を単に関連ゼミだけの発表会で終るのではなく、設備の整った学内の情報機器を利用し広く公開することは、学部教育の内容を学外にも直接伝える機会としてもまたないチャンスである。受験生にとっては、環境情報学部の教育・研究の中身をより具体的に把握するのに大変役立つに違いない。そうした意図で、講義の学外ライブの経験もあって、卒業研究発表会をインターネットで発信する企画が浮上したのである。



図2 平成12年度卒業研究概要集

## 3 最終講義の学外ライブ中継

本学部の小沼通二学部長(当時)及びドウ・ジョージ先生が本年3月をもって定年退職されることを記念し、最終講義を一般公開することになった。この機会にその講義を広くインターネットでも公開する企画が持ち上がり、1月に学外ライブ中継が行われた。講義終了後、先生を囲み、学生による花束贈呈や謝辞などが次から次へ



図3 定年退職者最終公演における花束贈呈

と繰り広げられた。ライブ中継は、臨場感のある会場の熱気がそのまま届けられたことで、学外からも大きな反響が寄せられた。ただ残念なことに、小沼学部長の講演では、当日十分な準備で臨んだにもかかわらず、講演中に教卓の機器が故障し、一時音声途切れるなどの放送事故が生じた。マイクの音声は教卓機器を通して配信されていたので、想定外の緊急事態にすぐ対応が間に合わなかったのである。このようなトラブルもあったが、ライブ中継は貴重な経験ができた有意義であった。定年退職者最終講義のライブ中継は、今後も恒例企画として定着することで、学部の良き伝統となるにちがいない。

**2001年1月実施のライブ中継**

ドウ・ジョージ先生

1月17日(木) 13時15分から14時45分

最終講義「American Dreams/American Realities」

小沼 通二先生

1月19日(金) 16時45分から18時15分

最終講義「物理学との50年」

上で個々の研究室ごとの対応ができず、担当教員の意見を発表グループ単位で取りまとめた関係もあり、今回は外部へのライブ中継は見送ることになった。卒業研究発表会のスケジュールと学内ライブ中継については表1のとおりである。

表1 卒業研究発表会スケジュール

	グループ	研究室	教室	テーマ
7日 AM	1	小沼・高田	31A	12
PM	2	中原・川村・増井	31A	23
PM	3	沼田、廣田	32A	19
PM	4	岩村・宿谷	プレントホ	18
8日 AM	5	中村(英), 巖	31A	14
AM	6	倉沢, 富永	32A	18
PM	7	小堀, 吉崎	31A	22
PM	8	櫻井, 小野, 西嶋	32A	22
PM	9	山田・横井・武山・清水	プレントホ	26
9日 AM	10	岩男, 中村(雅)	プレントホ	26

注： は学内ライブ中継

**4 卒業研究発表会ライブ中継の可否**

上記の最終講義のライブ中継に関しては、両先生の許可を要するのみで手続き的には簡単であった。ところが、学生の卒業研究発表会のライブ中継となると関係者のうちの範囲まで許可をとるかという問題がある。手続き的には、教務委員会で検討し、教授会で了承を得るのが一般的であろうが、今回については、丁寧に段階を踏む時間的余裕がなかった。

当初は、卒業研究発表会のライブ中継まで考えておらず、在校生の参考となるように、ビデオ録画を撮り、図書館にAV資料として配架するという、いわば図書館的発想にすぎなかった。環境情報学部の卒業研究は、学生が全員必修であり、担当教員の指導上受け入れの人数制限をせざるを得ない事情もあり、学習・研究内容のバラツキも予想される。広く公開に耐えるだけの発表内容かどうかのチェックする時間もなかった。このような経緯であるから、学部内コンセンサスはもとより、担当教員及び学生の心の準備もないまま、外部へ発信することは教育的配慮に欠ける恐れもあった。

そこで、これらのいくつかの問題を踏まえ、学部長、教務委員長及び情報メディアセンター所長との打ち合わせを行った。その結果、今回は教務委員会等において機関決定する時間的余裕もないことから、卒業研究担当教員全員に対し、情報メディアセンター所長からEメールにより直接アンケートをとることで落ち着いた。幸い、ビデオの録画については、担当教員全員の了承が得られた。また、卒業研究発表会のライブ中継についても、複数の発表グループから賛同が得られ、世田谷及び横浜キャンパスに限定したライブ中継が可能となった。なお、外部発信への積極意見も多かったが、ライブ中継を実施する

**5 スタッフと進行**

ライブ中継とビデオ収録の方針は決まったが、スタッフに不安が残った。なにしろ、発表会は、3会場での同時開催だからである。ライブ中継は、素人を含め少人数で取り組むには、マニ



図4 他会場の発表様子を見る学生

ュアルなどを作り、的確に指示しないと、思わぬハプニングによって中継に支障をきたす恐れがある。発表者との緊密な打ち合わせを行い、カメラワーク、資料提示、照明等の連携がなくてはよい結果が得られないからである。ところが、今回は、主体はあくまで学生であり、発表経験も不足しているばかりか、ギリギリまで発表練習に余念がない。そんな状況下でとても細かく打ち合わせや指示ができる環境になかった。ここは学生に余計な作業や気配りを押し付ける



図5 武山研究室の発表とテロップ例

ことなく、成果を思う存分発揮してもらうことに重点をおく必要がある。したがって、会場設営を始め、教室内の照明の調光操作やマイク音量調整、発表順番や進行状況などは、一切、学生自身に任せることにし、実際、何の打ち合わせも注文もしなかった。スタッフは研究室名などの簡単なテロップなども準備したが、直前に発表順番などの変更もあり、一部テロップがうまくいかなかったこともあった。特に教室内の照明の調光操作は、会場によって学生による操作のバラツキがあって、発表者の顔などが暗くなってしまい、ライブ中継や録画の品質に大きな課題を残した。

しかし一方では、カメラ操作など、全くの経験のない



図6 撮影とカメラ切り替え操作

学生や事務スタッフにも担当してもらうなど、広くスタッフの養成に役立てることができたのは収穫であった。情報環境

の進展により、ブロードバンドの時代が到来しようとしている今日、ホームページの発信と同様に、動画などライブ中継の情報発信も限られた人のものだけでなくに違いない。今後も機会があればより多くのスタッフに参加してもらいたい。

## 6 学内ライブ中継の問題点

実際に携わった学生と担当者の意見を集めたのが、以下の事項である。ライブ中継時の反省点は極めて細かい点が多いが敢えて参考として列挙した。

### 6.1 実施した撮影と対応者人数

表2 撮影計画表

	プレゼンラ	31A	32A	映像対応	総員
7日 9:00-	- /0/0	撮,発/3/2	- /0/0	送出/2/-	5
13:00-	撮,発/1/3	撮 /2/1	撮 /1/1	送出/2/-	6
15:00-	撮,発/1/3	撮 /2/1	撮 /1/1	送出/2/-	6
8日 9:00-	- /0/0	撮,発/3/2	撮 /1/1	送出/1/-	5
13:00-	撮,発/2/3	撮 /1/1	撮 /1/1	送出/2/-	6
15:00-	撮,発/2/3	撮 /1/1	撮 /1/1	送出/2/-	6
9日 9:00-	撮 /1/1	- /0/0	- /0/0	送出/2/-	3
13:00-	撮 /1/1	- /0/0	- /0/0	送出/2/-	3
15:00-	- /0/0	- /0/0	- /0/0	- /0/-	0

注：撮はビデオ撮影、発はライブ中継発信の作業内容と/(作業者人数)/(カメラ台数)

その他、準備と撤収作業があり、撤収には8名程度が当たった。

## 6.2 反省点と課題

### 事前準備

事前の広報不足

企画の遅れによりインターネット発信のためのWebページ作成が遅れた結果、十分な事前の広報が行えなかった。

### 会場設営

カメラ機材による入場制限

プレゼンテーションラボ(教室)での撮影は、常設カメラ2台の他、教室最後尾に移動カメラを置き、3台で撮影を行った。このため、三脚や機材の置き場の関係で後部ドアからの入退場がしにくくなった。



31A 教室に 図7 プレゼンテーションラボでの撮影おいても同様である。

### 相互連携

マイク使用の不徹底

発表者や司会者がマイクを使用しないで質疑応答が行われることがあった。

ビデオタイトラーの操作ミス

発表者の正確な順番表がなく、必要なタイトル文字の出力/消去のタイミングを逸したり、間違ったタイトルを出力してしまった。

プログラムの打ち合わせ不足

発表する研究室などとの連携がなかったので、発表者の立つ位置、使用機器など必要な情報を入手しにくかった。

スケジュールの時間超過への対応

発表時間延長により、途中でテープを交換しなければいけないことがあった。

また、時間延長

により“閉館のお知らせ”の館内放送が会場に流れた。会場の変更

研究室の都合で発表会場の変更があったが、当日直前まで連絡がなく、情報メディアセンターの開館時間の



図8 ビデオ収録中

変更やカメラの移動などの対応が十分に取れなかった。スタッフ連携不備  
 3会場を結ぶインカムシステムがなく、適切な指示が出せない場合や連絡の二度手間などが発生した。また、連絡を学内PHSで行ったため、呼び出しや会話などの音声会場に一部漏れた。

**スタッフ**

休憩時間の不足  
 スケジュールの変更や時間の延長を含め、要員が十分に配置できなかったこともあり、勤務員の休憩時間や昼休みなどを取りにくかった。その結果として長時間撮影を強いることにもなり、操作ミスなどを誘発することもあった。

**課題**

以上のように、卒業研究発表会は、学生が主体で運営するという問題はあるが、どの点も十分な打ち合わせと連携ができれば解決する問題が多い。これらは基本的にはマニュアルがあれば大きなミスも少なくなるだろうし、また、機材も取り揃えれば解消するものもある、むしろ問題は、発表者グループが自ら行う教卓での音声と照明の取り扱い操作である。映像品質を高めるには、スタッフも機器操作等の手伝いができるならよいが、それでは自主的な学生の発表や機器操作の経験を失われかねない。司会者や発表者がマイクを使わない時などは、予め決めたサイン等で知らせてやればよいが、マイクを口元に近づけすぎるなどの発表者固有のくせもあり、次から次へと発表グループも代わるため、学生に安定した音声調整まで求めるのは難しいであろう。また、司会者や発表者の顔などはスクリーンが相当明るいので対照的に明暗ができてしまう。その対策として撮影スタッフがスポットライトや補助光を当てることも考えられるが、このことによって学生を緊張させてしまわないかという懸念もある。これらの点は、卒業研究発表会の目的を踏まえ、教育的配慮もせねばならない問題である。卒業研究発表会のライブ中継は、今回のような経験をもとに、少しずつ創意工夫を重ねていけば、より充実した意義のあるものとなるだろう。

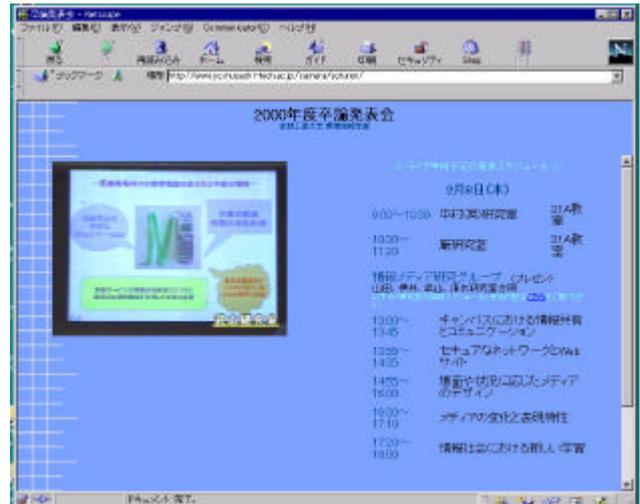


図9 ライブ中継のパソコン画面

**7 おわりに**

卒業研究発表会のライブ中継は、急に持ち上がった企画なので、充分検討する時間的余裕もなく実施されたが、結果としていろいろな課題が多く見付き、今後のライブ中継には貴重な経験とノウハウが得られた。これらの経験をもとに、いつでもどこでもだれでも情報を発信できるよう環境を整備していきたい。また、卒業研究発表会の外部発信についても学生スタッフの手で発信ができるような体制作りを積極的に進めていきたい。

当初の目的である卒業研究発表会のビデオ集は、予定どおり、図書館の視聴覚AVコーナーに、卒業研究概要集とともに配架を完了できた。情報メディアセンターでは、こうして完成された貴重なAV資料をもとに、さらに一歩進めて、横浜キャンパス内であれば、どこでもいつでも誰でも見られるよう、ビデオ・オン・デマンドの構築を目指し準備中である。在校生にとっては、先輩の残した学習・研究の成果を手軽に参照できることから、この卒業研究発表会ビデオ集もオンラインキャンパスのよい事例となることだろう。